

1998年の本。

皆さんが仮に酔っ払い運転をして——これは「酒気帯び」程度でも同じですが——ともかく呼吸の中にアルコールが多少にかかわらず検出される状態で人身事故を起こしたとします。

こつんと追突して相手の運転手が軽いむちうち症になった場合も同じです。さて、どうなるか。

近所の交番からお巡りさんが来たとします。そのとき、加害者であるあなたがちょっとでも酒臭かったら——お巡りさんは有無を言わずあなたに手錠をかけてしまうのです。

この場合、追突したほうがしらふで、されたほうが酔っ払っていたら、**状況の如何にかかわらず加害者は逆転**します。

「酒酔い運転」とは、検問に引っかかったときの、道交法上の呼称であって、あなたは事故を起こした瞬間から「**業務上過失致死傷**」という**刑法犯**になってしまうわけなのです。刑法犯であるからには、お巡りさんは「**現行犯逮捕**」の規定にしたがってあなたに手錠をかけ、所轄警察に連行しなければなりません。

腰ヒモ持たれて「猿過し」の現場検証

このように「酔っ払い運転は日常生活に起こりうる最もハイリスクな犯罪であります。くどいようですが、ともかく酒を飲んで事故を起こせば、必ず身柄は拘束されます。どこの警察署の留置場にも、一晩にひとりか二晩にひとり、ことに休日の夜には必ず、この哀れな犯罪者が放り込まれてきます。

社会一般では、法律で禁じられている**麻薬、大麻、覚醒剤**の三者を混同して考えがちですが、これらは元来まったく違うものであります。ごく簡単にこの三者の分警説明しておきます。

まず**麻薬**とは、アヘン、ヘロインなどの**アルカロイド系薬物**の総称であります。これは、鎮痛剤としての医薬効果の大きな、つまり本来はれっきとした医薬品なのです。極めて即効性があり、投与方法が簡単であることから特に事故などの激痛をとりあえず止めるためには欠くことのできないものであります。

したがって世界各国の軍隊の衛生兵は必ず、すぐ使用できる状態で麻薬を携行しています。いわゆるモルヒネであります。

・・・

次に「大麻」であります。これは芸能人の大麻汚染ということがたびたび問題になりますので、近頃ではむしろ麻薬より有名になりました。

大麻は広義では麻薬の表であります。いくら**常用しても麻薬のように禁断症状が現われることはありません**。ただひたすら陶酔し、ハッピーになるだけです。その効果は麻薬よりむしろアルコールに近いと言えます。

私見を申し上げますと、大麻を法規制する根拠ははなはだあやふやでありむす。吸飲に伴う幻覚症状が凶悪犯罪を引き起こすと当局は説明していますが、そんな実例は聞いたことがない。

大麻の幻覚などというものは、酒に酔って後先がわからなくなった状態よりずっと正常であります。

むしろ誰にも共通していえるのは、ちょうど「酒グセのいい酔っ払い」の状態、快活になり、**幸福感いっぱいになる**。まったく罪のない「愛好者」そのものであります。

ただし、快楽を追求するのは人間の本能でありますから、より以上の快楽を覚醒剤や麻薬に求めようとするのは彼らのお定まりのコースでありまして、どうやら「大麻取締法」には覚醒剤や麻薬の水際防止的な意味が含まれていると思われまます。同様の理由から青少年に対するシンナー遊びなどが厳しい補導対象になるわけです。

大麻の麻酔成分は、樹脂中に含まれるカンナビールという物質であります。この成分は厳密には麻の全品種の腺毛内から分泌されます。したがって「大麻取締法」の施行と同時に麻の栽培は徹底的に規制されたのであります。それによって生産農家がどのくらいの打撃を受けたか、そして麻製品を輸入することになった商社がどのくらいの利益を得たかは知りま

殺人事件でさえ情状によっては懲役五、六年などとい

うこともあるのに（やくざ者同士の殺し合いなどは、たいていこの程度です）、覚醒剤所持使用で懲役十年などという場合がある。特に再犯率の高い犯罪でありますから、執行猶予中の再逮捕などが多く、それこそ目もあてられないような重い判決が下るわけなのです。

覚醒剤に対してこのような量刑が科せられる理由は二つあります。

一つは、いうまでもなく暴力団の有力な資金源であるからです。一般に覚醒剤と呼ばれるものは、正しくは**アンフェタミン**、または**メト・アンフェタミン**（ヒロポン）という化学薬品の総称であります。なにしろ化学薬品なので製造コストは馬鹿みたいに安い。その馬鹿みたいに安い物が法で規制されて、リスクに応じた高値がつくわけですから、法的リスクそのものが商売であるヤクザが、これに手を出さぬわけはありません。

・・・

（第二の理由）。それは覚醒剤を**連用する**

と**精神分裂症に酷似した症状が現われる**ということでありまます。つまり幻覚や被害妄想といった症状が一過性ではあります。歴然と現われる。キチガイになってしまうのであります。アルベール・カミュの『異邦人』という小説には何の**動機もなく理由もなく衝動的に殺人を犯してしまう人間**が描かれていますが、覚醒剤中毒者の犯罪心理とはまさしくそのようなものであります。

隣のシャブ中を見分ける簡単な方法

私は私の経験上、ある程度の常用者はおぼ

ひと目で鑑別することができるからです。これは近頃とみに目立つのですが、町を歩きますと、間違いなくシャブ中であると思われる人とバタバタと出合います。電車の中や喫茶店やスーパーマーケットや、ありとあらゆる場所にシャブ中はごろごろいます。

つい先日のことですが、新興住宅地のファミリーレストランで昼食をとっておりますと、隣のボックスに四人連れの主婦が座りました。三十代半ばくらいの、いかにもようすのいい

婦人たちであります。なにげなしに見ておきますと、驚くことに彼女たちは普通の会話を交わしながら、覚醒剤常用者特有のある行動を続けているのであります。

私は一瞬、目を疑いました。それは何か、というと、話しながらやたらにテーブルの上の目に見えぬほどのゴミを指で拾い続けるのであります。テーブルの上ばかりでなく、自分や隣席者の服、座席、窓枠に至るまで、清潔なレストランの中がそんなに汚れているはずもないのですが、せわしなく指を動かしては目に見えぬゴミやチリを、ちょうど猿がノミを取るようにして取り除いている。これはまさしく**シャブ中特有の奇行**なのであります。

・・・

そのうち、ひとりがトイレに立ち、しばらくして戻ってきますと、プーンと甘い香りが私の鼻を突きました。**シャブ特有の甘ずっぱい匂い**であります。

「ははァ、打ってきたな」

と、直感しました。

ヘロインとシャブの効能の違いとは？

留置場に放り込まれた容疑者と房内の先輩の会話をしてみましょう。

「あんた、何して来たの」

「注射違反です」

「熱いの？ 冷たいの？」

「そりや、冷たいのですよ」

熱いのか冷たいのか、というのは麻薬か覚醒剤か、という意味であります。ヘロインを打ちますと一瞬体がぼうっと熱くなり、意識もぼんやりとして恍惚状態になります。対して覚醒剤を打った瞬間は、ゾッと寒気が走りまして、鳥肌が立ち、髪の毛までがザワッと逆立つ感じがします。そして、極めて気分爽快になり、悩みなんかすべて吹き飛んでしまって、限りなくハッピーな気分になるのであります。

・・・

覚醒剤が広くはびこるもう一つの理由があります。

それはほかならぬ、セックスにおける効用であります。これはいかなる媚薬にもまさるもので、通常のセックスの百倍ぐらいの快感が得られるのであります。先に述べたように、五感が鋭敏になるのでありますから、いわば全身が性器になるようなもので——その先はどうぞご想像ください。

優秀な犯罪者とは性懲りもなく塀の中と外とを往復している人のことではない。口笛を吹きながら塀の上を歩いている人々のことでもあります。

狭い塀の上を、決して内側に落ちずに歩き続ける——これは実に難しいことでもあります。

豊富な経験、十分な法知識、信念と気力、そして何よりも体力がなくてはならない。

体力といわれてもピンとこない方がいるかもしれませんが、刑事や検事の取り調べに対して「ゴネ」や「ダンマリ」を押し通して、毎度塀の外側に飛び降りるためには、強靱な肉体

がどうしても必要なであります。

刑事訴訟法は裁判をすみやかに処理し、かつ憲法の謳う本的人権を尊重するために、すべての法行為について一定の「制限時間」を定めています。逮捕から起訴に至るまでの期間は次のように設定されています。

被疑者は逮捕後四十八時間以内に送検され、さらに二十四時間以内に検事は裁判所に対して勾留請求をする。この勾留期間は十日間、やむをえない事情のあるときは、最長十日間に限って勾留の延長ができる。いわゆる国事犯だけはさらに五日間の延長勾留ができますが、一般の被疑者は、たとえどんな理由があれば、不起訴のままそれ以上身柄を拘束されることはありません。

つまり被疑者は**逮捕後二十三日以内に起訴されなければ釈放**されるわけであります。

二十三日間、被疑者が徹底して、「ゴネ」「ダンマリ」を押し通し、これといった決定的物証が得られないとなると、検事さん刑事さんは裁判所の命令にしたがって、泣く泣く釈放しなければなりません。

「尊属に対する尊重報恩は社会生活上の基本的道義であり云々……」とかいうふうに説明されています。しかし良く考えてみれば「尊重報恩」などという言葉は一種の身分制道徳の見地に立つもので、個人の尊厳と人格価値の平等を基本的な立脚点とする現憲法では、許されざる言葉と言わねばなりません。

「**基本的道義**」に至っては合理的に説明のつかないことを抽象的表現によって説明しようとする**最悪の用語**であります。

~~~~~

#### 尊属殺

自己または配偶者の直系尊属を殺害することをいう。日本の刑法では普通殺の場合に比べて刑が加重され、死刑または無期懲役に処せられることになっていた（200条）が、日本国憲法のもとでは、このような尊属殺重罰規定は法のもとの平等原則（14条）に反しないかという批判にさらされることとなり、最高裁判所も、1973年の判決で、従来の考え方を改め、「尊属に対する尊重報恩は、社会生活上の基本的道義というべく……刑法上の保護に値する」としつつも、刑の加重の程度は「極端であって……立法目的達成の手段として甚だしく均衡を失し、これを正当化しうべき根拠を見出しえず「その差別は著しく不合理」であるとして同条を違憲とし（最大判 1973.4.4.刑集 27 卷 3 号 265）、95年の刑法改正で同条は削除された。

~~~~~

命のかかった大一番で丁と出るか半と出るか、それは神のみぞ知るところであります、ただ一つ私が言えることは、**生に対する執着の薄い人間は、数多くの事件(ヤマ)を踏んでいく間に**

必ず命を落とします。

そして、数々の死線を越えて金を残すなり一家を成すなりする人間は、頭のできや腕力の強さよりもまず、生命力が旺盛で物事をあきらめない。しぶといのであります。

これは何も犯罪者に限らず、商売の世界でもサラリーマン社会でも同じことでしょうが、難局に当たったとき、「もうダメだ」と思えば人間はいとも簡単に死にます。

一般社会では殺されぬまでも、落伍して社会的に死んでしまう。

「整理屋」とは一つの会社が倒産したとき、債権者の中に紛れ込み、どさくさにまぎれてばく大な利益を得る稼業のことです。

・・・

整理屋の仕事は先手必勝でありまして、どんな倒産劇でも実際に不渡りが発生する少なくとも半年以上前に、きたるべきXデーを予測していなければ、介入する資格はありません。

つまり情報が勝敗を決定するのでありまして、名だたる大物整理屋の事務所などを覗きますと、まったくビックリするぐらいの先進のOA機器が並んでいるものであります。

もちろん、同時に組織的人為的な情報網もまた不可欠でありまして、上は国会議員から下はラーメン屋の出前持ちに至るまでの情報を、常に入手できる態勢を維持していなければなりません。ことに金融情報については表・裏ともに精通していなければならない。主だった整理屋の事務所が、銀座、神田、赤坂といった都心の一等地に集中しているのは、こうした金融情報が人手しやすいからであります。

「倒産は筋書のないドラマである。舞台上上がった俳優たちの手で筋書は自在に描かれていく。しかし、誰が主演者であるかは、暮が降りるまでわからない」

これは私が修業時代に師匠から教わった金言であります。

・・・

やがて場面が緊張していくにつれて、シロウトの債権者や場なれをしていない弁護士などは、尻尾を巻いて逃げ出してしまい、ヤクザの中でも単純に暴力志向型の、いわゆる「キリトリ」は脱落してしまう。気の弱い債務者は自殺したり、逆にあんまり手こずらせる債権者は消されてしまったりもするので、クライマックスを迎える頃は登場人物も債権そのものもだいたいすっきりと集約されているものです。

さんざすったもんだの末、生き残りの債権者合議を開いてみると、なんのことはない、整理屋も金貸しもヤクザも弁護士も、かつて知ったるいつものメンバー、などという笑い話もあります。

こんなときには、

「なんだね、これじゃあラチもないねえ」

などと紳士的に笑い合って、結局なれ合いの談合で一件落着。大物ぞろいの事件がえてして意外や平穏な結着を見るのは、大詰めのメンバーを見渡してみても全員が身の危険を感じ、命が惜しくなるからなのであります。

いち早く主導権を握る最大のポイントは、まず債務者の身柄を確保することです。

この行為を「ガラを取る」とか「頭を押さえる」とか言います。社長本人の身柄を取ってしまえば、勝負は五割がた決まったようなものなのです。

この際、甘言を弄するか強引に監禁するかは相手によりけりですので、整理屋グループにはこの序盤戦のヤマ場で機先を制するために、たいていふたりの役者を用意しているものです。つまり、債務者に同情するフリをして「まあ私に任せてください。悪いようにはしませんから」というタイプと、「言うとおりにすりゃ、命だけは助けてやる」というタイプであります。

ガラの置き場所はほとんどの場合都心のホテルであります。たとえ偽名であれ、本人自筆で宿帳にサインをすれば、後でどう訴えられようが監禁罪は立証できないからであります。

昔からどういうわけか銀座第一ホテルと赤坂東急ホテルがよく利用されます。両ホテルとも交通の便がよく、人の出入りが多いので目立ちにくいからでありましょうか。これらのホテルには常時ふたりや三人はこうした気の毒なお客様がいます。

こうしてとりあえずご本人は債権者たちからの追求を逃れることができるわけで、いきさつはどうであれ、ホテルの密室に監禁されてボディガード兼見張り役付きの弁当生活に入りますと、「命だけは保証された」とホッとするのか、どんな強気の社長でもたちまち虚脱状態になります。

もちろんそれは錯覚で、実は命の保証など全然ない。正しくは「マナイタの上ののった」のであります。

この虚脱状態はだいたい二日も経てば覚めてしまうので、私たちはその間にせっせと豪勢な弁当を運んだり、ビデオセットを持ち込んだり、女を派遣したりするわけであります。

昔はよく、ビタミン剤だなどと言ってシャブや麻薬を打ち、てっとり早くプツツン状態にしてしまったものですが、今日では後々ヤバいのであまりやりません。

ともかく密室の中で催眠術をかけ続けるわけで、考えつく限りの快楽を与えるわけであります。で、この夢のような生活が一週間も続きますと、長い間金繰りに死ぬ思いをしてきた社長さんたちは、

かつて社長といわれたトコロテン」

「かつて専務であったトウフ」

に変身してしまうのであります。

一週間後、ホテルを訪ねますと、室内はまるで阿片窟みたいに自堕落な空気に満ちておりまして、ベッドの上に横たわった巨大なトコロテンがボンヤリと「ランボー3／怒りのアフガン」などを見ている。

ここまでいけば九割がたは勝ちであります。

トコロテンの肩を抱き、とっておきの慈愛にあふれた、広隆寺のミロク菩薩のような笑顔を向けて、

「社長もたいへんだったね。あとは私に任せて、大舟に乗った気持ちでいなさい。もう一度頑張って世間を見返してやろうよ」

などと言いますと、トコロテンは感極まって涙を流したりするのであります。

このようにして戦争に必要な武器——不動産権利証や手形帳、実印、銀行印、委任状といったものが私たちの手に落ちるわけであります。

さて、いよいよ戦闘開始。

まず不動産には抵当権、貸借権を目いっぱい設定し、架空の手形を乱発して一夜にして筆頭債権者にのし上がる。次に若い者を動員して、社長の自宅や会社、倉庫などを占拠し、フトンやナベカマを持ち込んで居座らせてしまう。動産や在庫品はただちに換金する。車や電話は金融に沈める。クレジットカードで存分に飲み食いしたり、保険証片手にサラ金を回ったり、ともかくできる限りのことは何でもやる。まさにハイエナであります。

さて戦(いくさ)は当方の大勝利に終わり、もうペンペン革も生えていないことを見届けてから、すっかりグズグズに腐ってしまったトコロテンのところに向かいます。

「社長、もう大丈夫だから、しばらく骨休めに温泉でも行ってきなさいよ」
などといって、ささいな賤別を渡し、やおらタクシーを呼んで社長を押し込み、「伊香保」などといい加減なことを言います。この際もし後腐れがあるようだったら、債権者中で最も過激な組織に怪電話を入れて、「トコロテンはイカホにいるゾ」などとチクするのも一つの方法であります。私たちはその夜のうちに事務所を畳んで三々五々散っていきます。

で、戦いすんで日のくれたワイキキの浜辺で、冷えたカクテルなんぞ飲みながら無上の喜びを味わうのであります。

さてその頃、海の彼方の伊香保温泉でいったい何が起きているのか、そんなことはもう知ったことではありません。

年齢とともに大業を遂(な)すための重要な要素である俠気(きょうき、おとこぎ)と情熱とは必ず衰弱するものであります。

この精神的老化現象を通常、業界では「ヤキが回る」と言います。

真心は下心の異名でありまして、したがって日本でいう贈り物には必ずなんらか、贈る側の暗意が隠されているものであります。

果ては「銭金じゃねえ、おめえの体を取りにきた」などと言い出す。こういう単純な脅し文句も悪党としてのステータスのない証拠。

ちょっと気弱な表情を作ると、「そうか、根は悪い奴じゃなさそうだな。だが俺も手ブラじゃ帰れねえ。子供のつかいじゃねえんだ」

ホレきた、と私は顔を上げ、

「ありがとうございます。あいにく持ち合わせがないもので、つまらない物ですが、これでもどうぞ、と言ってやおら机のひきだしから四五口径コルトなんぞ取り出して、「オラオラオラ」なんて言いながら眉間に突きつける。本当に鉄砲玉の下をくぐったことのない暴走族出身の始末屋さんはたいてい「ヒ。」とか言って腰を抜かしてしまいます。この「ヒ。」が聞きたくてこの手は三度も使ってしまった。反省しております。

すなわち拉致殺害事件などというものは、**死体が発見されない限り事件として扱われない**のでありまして、だからこのへんの事情をよく知っているプロや、とりわけお巡りさんは人殺しをするとすぐ埋めてしまうのであります。あとは**どんな証拠を突きつけられても知らぬ存ぜぬを通せば立件は困難**、起訴してもまず公判維持は困難であることを、彼らはよく知っているからであります。

「死体なき殺人事件」などというミステリーは小説では考えられても、現実にはありえないことなのであります。

命の次に大事なものは金だ、と考える人間はまず二流以下でありまして、金よりも大事なものをちゃんともっている人物こそ一流なのであります。